

# 教育委員会会議録

令和4年（2022年）11月定例教育委員会会議

開 会 日	令和4年（2022年）11月24日（木）	
開 会 時 間	午後2時00分 ～ 5時15分	
開 会 場 所	SPring熊本花畑町 7階 D会議室 ※一部オンライン開催 オンラインでの出席者については各執務室	
出 席 者	委 員 会	遠藤洋路 教育長 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 菅野一徳 委員 澤栄美 委員
	事 務 局	松島孝司 教育次長 中村順浩 教育総務部長 田口清行 学校教育部長 他
提 出 議 案	<p>議第81号 熊本市部活動改革検討委員会委員の委嘱について</p> <p>議第82号 桜井小学校第17棟校舎長寿命化改良工事請負契約締結に対する意見について</p> <p>議第83号 池田小学校体育館及びプール改築その他工事請負契約締結に対する意見について</p> <p>議第84号 富合小学校校舎増改築工事請負契約締結に対する意見について</p> <p>議第85号 熊本市立幼稚園規則の一部改正について</p> <p>議第86号 令和5年度（2023年度）市立学校の管理職（再任用）の採用について</p>	
協 議	<p>(1) 令和5年度当初予算の概要について</p> <p>(2) 教職員の懲戒処分について</p>	
報 告	<p>(1) 天明校区施設一体型義務教育学校基本計画（案）について</p> <p>(2) 市立高等学校・専門学校改革基本計画（必由館高等学校編）案について</p> <p>(3) 子どもたちの心のケアについて</p>	
自 由 討 議	(1) コロナ以来における不登校の実態と対策	
署 名	小屋松徹彦	
	菅野一徳	
会議録作成者	教育政策課 玉野あゆみ	

<p>〔開会の宣告〕</p>	
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>令和4年11月定例教育委員会会議を開会いたします。</p>
<p>〔会議の成立〕</p>	
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>本日は、私の他5人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。 会議録署名人は、小屋松委員と苫野委員とします。</p>
<p>〔公開の審議〕</p>	
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>本日の会議の内容につきましては、会議日程のとおりですが、招集通知後に追加で協議をお願いしたい案件が発生したため、案件を追加しております。当該案件は、議第86号 令和5年度（2023年度）市立学校の管理職（再任用）の採用について及び協議（2）教職員の懲戒処分についてです。 また、本日の議事のうち、議第86号 令和5年度（2023年度）市立学校の管理職（再任用）の採用について、協議（2）教職員の懲戒処分については、「教育委員会に属する職員の任免その他の身分取扱に関する案件」であること、議第82号 桜井小学校第17棟校舎長寿命化改良工事請負契約締結に対する意見について、議第83号 池田小学校体育館及びプール改築その他工事請負契約締結に対する意見について、議第84号 富合小学校校舎増改築工事請負契約締結に対する意見について、協議（1）令和5年度当初予算要求の概要については、会議規則第13条第2号「教育予算その他議会の議決を経るべき議案についての意見の申出に関する案件」であることから、会議規則第13条第1号及び第2号の非公開事由に該当し、非公開の審議が適切と思います。  議第82号、議第83号、議第84号、議第86号、協議（1）及び協議（2）につきまして、非公開に賛成の委員は、挙手をお願いします。  (全員挙手)  全員賛成により、議第82号、議第83号、議第84号、議第86号、協議（1）及び協議（2）は、非公開とします。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	
<p>日程第1 前回来議録等承認</p>	

遠藤洋路 教育長

10月27日開催の令和4年10月定例教育委員会会議録、11月9日開催の令和4年第3回臨時教育委員会会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録を承認することに、ご異議はありませんか。

(異議なしの声)

異議なしと認め、前回会議録等を承認することに決定します。

日程第2 事務局報告の件

(1) 事業・行事等報告について

- 前回定例会議（R4.10.27）以降の事業・行事報告
- 今後の予定

日程第3 議事

- ・議第81号 熊本市部活動改革検討委員会委員の委嘱について

《松永直樹 学校改革推進課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

- ・議第85号 熊本市立幼稚園規則の一部改正について

《福田衣都子 指導課長 提出理由説明》

西山忠男 委員

定員を35人から20人に減らすということは、その分、職員を増やすということになるのでしょうか。

福田衣都子 指導課長

1クラス20人になることで、例えば40人の場合は20人の2クラスになるんですが、今のところ20人を超える園児が来ることはあまり想定されておきませんので、職員数自体は今と変わらない状況と考えられます。

遠藤洋路 教育長

定員が35人ですけど、実員は20人以下だということです

	かね。
福田衣都子 指導課長	はい、そのとおりです。
小屋松徹彦 委員	関連しての質問になるんですが、私立の幼稚園についての実態はどうなってるのでしょうか。実態が分かれば教えてください。
福田衣都子 指導課長	3歳児は20人、4歳児は35人、5歳児は35人という国の基準があります。私立の各幼稚園でその範囲を超えないところで1クラスの人数を決めており、大体20人から30人程度の園が多いと聞いております。
小屋松徹彦 委員	先行事例として市立幼稚園が20人にされるのはいいことだと思うし、できれば私立の幼稚園もそれに倣うようなかたちになれば、とてもいいと思います。
遠藤洋路 教育長	他にご意見、ご質問はありますか。 ご発言がなければ、採決を行います。 議第85号 熊本市立幼稚園規則の一部改正について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。
	(異議なしの声)
遠藤洋路 教育長	ご異議なしと認めます。 議第85号については原案のとおり決定いたします。
<b>日程第5 報告</b>	
・報告（1）天明校区施設一体型義務教育学校基本計画（案）について	
《松永直樹 学校改革推進課長 報告》	
澤栄美 委員	特別教室について質問なんですけど、教育相談室というのがありますよね。カウンセラー室やカウンセリング室がいろんな学校にありますけど、それと同じと思っていいんですか。通常、カウンセリング室、カウンセラー室が設置されていますが、イ

	<p>コールと思って大丈夫でしょうか。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>ご指摘のとおりそういった想定です。個別面談を行う部屋を多く設けてもらえるとありがたいという学校のご意見等もありましたことから、他のスペースにおいても、同様にそういった機能に対応できるような施設計画を現時点では考えてるところです。</p>
澤栄美 委員	<p>個別の指導を先生方が行う部屋が必要ということですね。それと同じところでカウンセリングも行うということですか。教室が足りなくて、カウンセリング室のない学校がいまだにあるんです。カウンセリングは落ち着いた場所でないとできないので、きちんと想定してつくっておかないと、せっかく新しい施設ができるのに、こっちでは生徒指導をしているから定例のカウンセリングはできませんということにならないといいよねと思いました。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>委員ご指摘のご意見は、検討の過程でも出まして、どうしても時間帯によっては足りないこともあり得るということでした。ですから、そういった要望に反映できる部屋として、当然、専用の部屋も設けますが、他のスペースでも代用できるように設けたいということで、今考えているところです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>今のご質問は、カウンセリング専用の部屋があるんですかという質問ですね。それはありますということでしょうか。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>当然、それを設けつつ、他にも同様の機能を持つ部屋を設けることを考えております。</p>
澤栄美 委員	<p>カウンセリング室と教員が指導する部屋は同じ部屋ではないということですね。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>別の部屋で代替をする部屋を設けたいと、代替機能を持つてる部屋を設けたいと考えております。</p>
澤栄美 委員	<p>分かりました。</p>
西山忠男 委員	<p>2ページの避難所機能を有した施設整備の2番目、液状化対</p>

		<p>策について、2点質問があります。</p> <p>1点目は、この地域の地盤が緩いのはよく知られてますが、熊本地震のときに液状化が起こったのかどうかということをお教えください。</p> <p>2点目は、ここに書いてある解説の意味がよく分からないので、これを教えていただきたいということです。お願いします。</p>
松永直樹 学校改革推進課長		<p>1点目の液状化の被害が実際に起きたかどうかにつきましては、詳細を把握しておりませんが、天明地域の学校では起きておりません。周辺の埋立地について、一部液状化のような状態になったところがありました。</p> <p>2点目のご質問をもう一度お願いします。</p>
西山忠男 委員		<p>緩い地盤状況を加味して建物計画をコンパクトにすることで建築面積の縮減によるくい本数の低減を目指し、施設規模適正化を検討とありますが、この内容が液状化対策ってどういう意味なのかよく理解できないんです。</p>
松永直樹 学校改革推進課長		<p>ご指摘のとおり、それそのものが液状化対策というわけではございませんが、液状化対策をする上で、くいを相当な本数打たないといけないということが想定されております。そうなりますと、費用の低減を図るには、ある程度施設面積をコンパクト化したほうが全体費用を抑制できるため、このような記載を設けているところです。</p>
西山忠男 委員		<p>くいをたくさん打ったほうが液状化対策になるので、なぜこれが液状化対策かなと思ったんですけど、要するにコスト削減と液状化対策を両立させるための施策という意味ですね。分かりました。</p>
澤栄美 委員		<p>同じページで②のところですけど、2)にインクルーシブ教育システムの構築・性の多様性の尊重とありますが、この性の多様性の尊重について、例えば環境の整備など具体的なものがありますか。</p>
松永直樹 学校改革推進課長		<p>詳細につきましては、これからの検討になりますが、現時点で上がっておりますのは、多目的トイレと更衣室です。これは、避難所機能を設けるうえでも重要と思いますが、この2点が配</p>

<p>澤栄美 委員</p> <p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>慮事項として上がっているところです。</p> <p>性に違和感を感じている子どもたちが別のところで着替えられるなどの配慮を考えているということですね。分かりました。</p> <p>他にご意見、ご質問はありますか。</p> <p>ご発言がなければ、本件は以上といたします。</p>
<p>・報告（2）市立高等学校・専門学校改革基本計画（必由館高等学校編）案について</p> <p>《松永直樹 学校改革推進課長 報告》</p> <p>・報告（3）子どもたちの心のケアについて</p> <p>《須佐美徹 総合支援課長 報告》</p>	
<p>澤栄美 委員</p> <p>須佐美徹 総合支援課長</p>	<p>心と体の振り返りシートについて、私も現場にいるときに子どもたちにとっていたんですが、この項目のどのあたりに印があるとカウンセリングが必要とされるかというのが学校任せになってるところがあると思います。ある学校では、長年スクールカウンセラーの世話をされている臨床心理士の先生から、ここに丸がついた場合はこういう意味があるというのを提示してくださったということを聞きました。そういった指標となるものがあると、学校も対象となる子どもの判断ができるのかなど。人数が多い学校では、相当な数を判断するのは大変だったりするので、もしよければそういうことも考えていただけるといいと思います。</p> <p>心と体の振り返りシートについて、学校から報告を受けておりますけど、子どもたちが悩みを相談しやすいような方向であったり、子どもたちがなるべく早く相談できるように先生たちに周知していたり、あるいは子どもたちにカウンセラーの先生からお話をしていただくようなかたちを取ったりしながら、相談につなげていきたいと思います。</p>

<p>澤栄美 委員</p>	<p>心と体の振り返りシートの分析の仕方といいますか、そういったものを各学校で養護教諭が担当をしていると思うんですけど、ここの項目は特に注意をしなければいけないとか、この項目はちょっと様子を見ていいだろうとか、そういった指標みたいなものをつけていただくということは難しいでしょうか。</p>
<p>須佐美徹 総合支援課長</p>	<p>ご意見を検討させていただき、できるだけ早くそのように対応できればと思います。</p>
<p>出川聖尚子 委員</p>	<p>2つお聞きします。1つ目は、このようにカウンセリングの必要な児童・生徒が増えている要因はどのようなものかを考えていらっしゃるのか教えていただきたいと思います。2点目は、カウンセリングが必要となる前にお子さんたちの心の状態がいいということが望まれますが、そうならないために、現在行われている予防策、対策を教えてください。</p>
<p>須佐美徹 総合支援課長</p>	<p>カウンセリングの前に、学校の先生方で子どもたちの様子を見ながらお話をされるとかは各学校で取り組まれています。学級ごとにカウンセラーの活用状況調査をやっているんですけど、子どもたちの相談内容としては、心身の健康と保健面についての相談が一番多く、2番目にその他、3番目が不登校となっています。子どもたちの心身の健康、保健に関して、体調がちょっと悪いなどの相談がやはり一番多いので、子どもたちの健康の様子を見ながら早めに相談していくことが大事と思っています。</p> <p>子どもたちがもっと相談をしたいけど、なかなか先生たちと話ができないというときはカウンセラーの先生につないだりしておりますし、最初ハードルが高くてなかなかカウンセリングはという子どもたちもいるんですけど、そこを先生方が呼びかけてカウンセリングにつなげています。中には保護者の方も相談をされていますので、活用を促していきたいと思っています。</p>
<p>出川聖尚子 委員</p>	<p>心の状態が少しでもよくないときは、子どもたち自身がすぐに発信できるような、そういうメッセージを多く伝えられるといいと思いますので、教育委員会からも働きかけていただければと思っています。</p>

西山忠男 委員	<p>カウンセリングが必要と判断された生徒さんたちが2,500人余りいらっしゃるということですが、この人たち全員に対してきちんとカウンセリング対応ができているのかという質問が1点。</p> <p>それから、カウンセリングによって何%ぐらいの生徒さんが改善されて、残り何%ぐらいは継続してカウンセリングが必要な状況なのかが分かれば教えてください。</p>
須佐美徹 総合支援課長	<p>相談件数については、100%全員が相談しているというわけではないという状況です。</p> <p>それから、改善した割合については、把握ができておりません。</p>
西山忠男 委員	<p>100%対応できていないという理由は何でしょうか。先生やカウンセラーが忙しいということでしょうか。それとも、生徒さんがもう相談に行きたくないという状況なのか、どちらなのか教えてください。</p>
須佐美徹 総合支援課長	<p>相談にうまくつなげられないケースとしては、タイミングが合わない場合もあり得ますし、それから、つなげたいけどもいいですという子どもたちも中にはいますので、そのあたりは丁寧に話をしながらつなげていく必要があるかなというふうに思います。</p>
澤栄美 委員	<p>付け加えると、カウンセラーの仕事は、個別の面談だけではなくて、予防的な取組になる部分として、心に関する講話なども担当するようになっていきます。できる限り面会の対象がないときはそういうことを行ったり、カウンセラーだよりなどを出すようにしています。</p> <p>それから、ぜひ言っておきたいのは、養護教諭が保健室でかなりの部分を対応しています。養護教諭だけでは難しいと思われる事例をカウンセリングに持っていかとか、例えば嫌がってる子どもでも、カウンセラーが来る日を狙ってたまたま保健室にカウンセラーがやって来てお話をしたみたい工夫したり、カウンセリングすることを好まないような保護者がいらっしゃった場合も、「たまたまカウンセラーが保健室に来たときにいたんですよ」というふうにしてつなげたりなど、間に立つ役割を養護教諭がしていることも知っていただければと思います。</p>

苫野一徳 委員

今、養護教諭、それから、カウンセラーのお話をさせていただきましたけど、養護教諭やカウンセラーの方々任せにはもちろんしちゃいけないと思うんですよね。どれくらい連携が取れているのかということ、情報共有がなされているのかということ、それから、心のケアだけじゃなくて、スクールソーシャルワーカーとの連携であったり、心に目を向けるだけじゃなくて、何か物理的なことだったり、経済的なことだったり、様々な要因があると思うんですよね。そのあたりをみんなで連携していく必要あると思うんですけど、連携体制がどのようになっているのかお聞かせいただければと思います。

須佐美徹 総合支援課長

子どもたちの支援につきましては、例えば担任に情報が入れば、それを同学年であったり養護教諭と情報共有しながら、どのように対応するか、どういうときにカウンセラーにつなげていくか、家庭環境の調整が必要であればスクールソーシャルワーカーに入ってもらえるなど、ケース会議みたいなものをしながら対応している学校も多いところです。

澤栄美 委員

巡回相談員の制度があると思うんですけど、そのことについて詳しく説明していただいてもいいでしょうか。

野田建男 特別支援教育室長

巡回相談員については、笑顔いきいき特別支援教育推進事業の中で、市内の特別支援学級の先生、県立の特別支援学校の先生、熊大附属の特別支援学校の先生にご協力いただき、学校における特別支援教育の課題についてアドバイスをしたり、求めに応じて講話をしたり、そういったかたちで活用いただいております。

澤栄美 委員

なぜその質問をしたかということ、苫野委員が連携が必要じゃないかと言われたときに、現場にいた頃、巡回指導員に来ていただいてケース会議をよくしていたことを思い出したからです。例えば特別支援が必要なお子さんに関して言うと、学級になじめなかったり、不登校になりがちだったりするので、そういうときに、専門の知識を持っていらっしゃる方に入ってきて、今後、その子の生活の様子を見ていくようなことも必要だろうというときには専門家が入るということをよくやっていましたので、そのような活用もいいということですね。

野田建男 特別支援教育  
室長

学校の困り感につきましては、相談いただき、調整をして、該当する分であれば巡回相談員を使っていただいでよろしいかと思ひます。

遠藤洋路 教育長

他にご意見、ご質問ありますか。  
ご発言がなければ、本件は以上といたします。

日程第6 自由討議

- ・テーマ「コロナ以来における不登校の実態と対策」

《須佐美徹 総合支援課長 説明》

遠藤洋路 教育長

では、ただいまから討議に入ります。時間は30分程度を目安といたします。

前半にいろいろなデータの紹介がありますが、結局このデータからどういうことが分析できたのでしょうか。

須佐美徹 総合支援課長

長期欠席者の数はとても右肩上がりで増加しています。その中に、不登校の児童・生徒数が含まれていて、もちろんそちらも多くなっているところす。スライドの7枚目を見ていただければ、長期欠席者の中の不登校の割合は、熊本市は物すごく高いですけど、要因別に分かれた場合に、例えばコロナやその他が物すごく少なくなっているというところが特徴であります。不登校の数は物すごく高いんですけど、要因別でいくならば、その他、コロナがかなり小さくなっているというところが熊本市の特徴となっています。もっと言うところ、熊本市は、長期欠席の子どもたちの中で、学校から不登校として報告されてくる数が多いというところす。これに関しましては、自治体によって取扱がばらばらではないのかと思われる部分もかなりあります。ただ、休んでる子どもたちは実際におりますので、実際に休んでる子どもたちにどう支援していくのかというところが一番大事なところだと考えているところす。

遠藤洋路 教育長

これを素直に読むと熊本市の子どもは不登校にはすごく

	<p>やすいけど、コロナにはかかりにくいというそういうことなんですか。</p>
須佐美徹 総合支援課長	<p>この数字だけから見るとそう捉えられないこともないかとも思われますけど、普通に考えた場合に、地域ごとにそのような偏りがあるかという、どうかなと思います。ただ、例えば子どもたちがある診断を受けた場合に、それで病気と判断する場合もあるかもしれません。しかし、不登校の要素が大きいと思われる場合は、不登校と判断するところもあるように、自治体によってまちまちになっている部分があると考えています。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>つまり、熊本市の子どもはコロナにかかりにくいわけじゃなくて、自治体によって分類の仕方がまちまちだということですね。</p>
須佐美徹 総合支援課長	<p>そのとおりです。</p>
澤栄美 委員	<p>今の7枚目なんですけど、コロナ感染回避となっていますので、コロナにかかりたくないから学校に行かないという子どもが少ないということですよ。</p>
須佐美徹 総合支援課長	<p>はい、感染者ではないです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>熊本市の場合、コロナにかかりたくないから休むという子どもが非常に少ないということですか。</p>
澤栄美 委員	<p>私は現場の先生方の声を聞いたときに、コロナにかかりたくないという理由で休む人が結構いるって聞いていたので、このデータを見ると、政令指定都市の中では、それでも少ないほうなんだなと思ったんですよ。ただ、不登校の長期欠席者数が多いということは、ある意味ではいろんな不登校に対する手だてがあるので、だから積極的不登校じゃないんですけど、そういう子どもが多いというのも考えられるのかなと、この表を見て思ったところです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>先ほど総合支援課長が言いましたけど、実態がここまで違うというよりは、分類の仕方がばらばらなんだと思いますね。だから、例えば1,000人長期欠席の人がいて、熊本市の場合</p>

は、そのうち800人以上は不登校なんだけど、さいたま市の場合は、たった190人ですよ。普通に考えたら、そんなわけじゃないですよ。だから、この800人と190人全部足していった人数、この24万人なんていう数字は何の意味もないと、これを見る限り、はっきり言って調査になってないということなんじゃないですか。平均がどのぐらいなのかも分からないですけど、極端に違いますもんね。だから、その他とかコロナ回避と分類したり、あるいは病気と分類すれば不登校が減るし、そういうものに分類しなければ不登校が増えるというのは、そういうくくりになってるということですよ。実際、長期欠席が一番多いさいたま市が、不登校の分類だと一番少ないわけですよ。そんなことあるかって思いますけど、現にそういう調査結果になってるわけですから、この調査結果の信頼性は極めて低いんじゃないかと私は思っているんです。

西山忠男 委員

私も全く同感なんですけど、私、北九州市に10年ほど住んでたので、北九州市と熊本市を比べてみると、不登校児童・生徒数は小学校だと熊本市が1位で北九州市は19位となっているんですけど、これが長期欠席児童・生徒数になると逆転して、北九州市が2位で熊本市が15位になるんですよ。だから、教育長がおっしゃったように、データの取り方が都市によって全く違うとしか思えないんです。だから、順位がどうだこうだと言っても仕方がない感じがいたします。考えるべきは、結局長期欠席だと思うんですよ。長期欠席者の内容をどう捉えるにせよ、やはり減らすことが我々の大事な目標なので、そういう意味で考えないといけないデータかなと思います。

遠藤洋路 教育長

おっしゃるように、長期欠席の理由が不登校に分類されてるか、病気に分類されているか、その他に分類されているかで何か支援の必要性が変わるというよりは、実際一人一人のニーズにどう応えるかということのほうが大事なんだろうから、長期欠席全体を見て、不登校ということに限らず、全ての子どもに支援が行き届くようにしていくことが大事なんじゃないかと私も思います。小学校のデータを見ると、一番長期欠席が多い自治体が一番不登校が少なく、2番目に長期欠席が多い自治体が2番目に不登校が少ないわけで、かなり偏った調査結果ですよ。それもわざとやっているとは思えないので、単に分類の仕方が違うんだと思うんですけど、ある程度統一しない限り、

	<p>調査としてあまり実効性がないような気がしますね。</p> <p>それはそれとして、支援をどうするかというのは、例えば8ページ以降は、不登校の要因とか不登校児童・生徒への支援の在り方となってまいすけど、結局、長期欠席の中の不登校だけを対象にしているわけじゃなくて、長期欠席全体を対象にするんだったら、長期欠席の全体に対する支援の在り方を考える必要があると思います。当然、ここで言ってる不登校というのは長期欠席全体を含んでという理解でいいんですかね。</p>
須佐美徹 総合支援課長	<p>今、教育長がおっしゃいましたとおり、理由はどうであれ、欠席してる子どもたちにどう支援をしていくかということが一番大事なかと私どもも思っており、ここに一番力を入れるべきだと考えております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>だから、ここで不登校の児童・生徒への支援と言っちゃうと、例えばさいたま市の場合は、1,000人中190人しか対象にならなくなっちゃうわけですよ。だから、そういう誤解がないように、もちろん熊本市でということになりますが、言葉の使い方を少し考えていく必要があるのかもしれない。これは別に1,000人中の810人を対象にした支援ではないということですよ。</p>
澤栄美 委員	<p>13ページに不登校の児童・生徒の支援についてとまとめたものを提示してありますけど、フレンドリーは別室、分室、そういったものができていると私も知らなかったんですけど、やはり参加者は増えてきているという感じなんですかね。以前、私が現場にいたときには、大江の教育相談室しかなかったんですよ。</p>
須佐美徹 総合支援課長	<p>あいばるが以前からありましたので、その通所の数がやはり一番多いです。昨年度1年間と現時点で大体同じぐらいの数まで来てますので、かなり通所の数が増えてると思います。それから、他はまだ人数は少ないものの参加はありますので、やはりアクセスしやすいということで大切だと感じているところです。先ほども申しましたけど、できるだけ周りの学校、近隣校にも周知をしていく必要があります。また、SSWの声かけによって参加につながったということもありますので、協力を得ながら、できるだけいろんな選択肢があるということを伝え</p>

遠藤洋路 教育長	ていきたいと思います。  13ページにフレンドリーは5教室書いてありますけど、今、澤委員がおっしゃった大江だけじゃなくて、城南の火の君と植木もやっていたということですよね。
須佐美徹 総合支援課長	そのとおりです。あいぱると火の君、植木があって、昨年度清水、本年度新町です。
澤栄美 委員	メタバースのモデル事業について、もう少し詳しく教えてください。
須佐美徹 総合支援課長	文科省に報告し、採択をされたものなんですけど、当初予定ではもっと本当早く進めようと思っていたのが少し準備に時間がかかって、12月の初めぐらいにはできるんじゃないかなと、今、準備を進めているところです。  ちょっと言葉で説明するのが難しいんですけど、例えば画面上に大きな丸みたいなものがあるんですけど、それがバブルというんですけど、学校のスタジオがあって、そこに小さい丸のアイコンみたいなものがあるんです。それが子どもたちのアバターみたいなものなんです。そのアバターは、子どもたちが好きに自分で絵を描いたり、自分の顔でもいいんですけど、大体顔はみんな嫌いますので、パペットをつくっている子はパペットで反応したりとかするんです。そういうものがあるって、スタジオが開いてからZoomに入るんですけど、その中に入ってそのZoomが開始するようなパターンですね。基本的に今やってるものと支援の方向自体は変わらないんですけど、子どもたちがZoomでやるときに、全部スポットライトといって周りが見えないようにするんですが、カメラはみんなオフなんですよね。みんなオフで真っ暗で、慣れてきてチャットとか、あと、リアクションボタンで反応はするんですけど、周りが見えてないといってもなかなか顔出しはできないという状況なんです。  慣れてきて少し出てくるようになってきたんですが、ヒントになったのが、先ほど言ったパペットで、すごく手芸が好きな子が自分で小さな人形を作り、小さな机と後ろにホワイトボードみたいなものを作って、それにZoomで映った内容をホワイトボードに小さく書いたりとかして、森的な部屋を作っているんですよね。反応してくれて、それを周りが見えないんですけ

	<p>ど、言葉で解説をオンライン学習支援員の先生がやってくれて、それを聞いて自分が好きなキャラクターをつかって動かしたりして反応しているのを見て、アバターだったら周りを感じながら、自分だけじゃなくてみんなで学習しているんだと感じながらできるんじゃないかと思いついたところです。</p> <p>あと、子どもたち同士もちょっとずつチャットができるようになっていきますので、自分は今話したいんだという子はハートマークが出て、その子とはいつでも話せる。青いボタンであれば、許可が出たら話ができる。それから、赤いボタンの子は、今は集中したいので話しかけないでくださいというように配慮をされていて、コミュニケーションを少しずつできたらいいかなというようなものです。他にもあるんですけど、バーチャルという意味ではそのようなものになります。</p> <p>パペットは今のフレンドリーオンラインの話ですよ。また、それがアバターとして参加、その仮想空間の中に入っていれば、お互いの交流もできるようになることが一つの利点ということですか。今はそれぞれがばらばらに入っていて、先生側からは見えますけど、子どもたち同士の交流というのは基本的にないので、それが一つの利点になるだろうということですね。その中で、授業とか、先ほどから紹介されている14枚目とか、そういったことは同じように行われるというイメージで考えていいんですか。子どもたちは普段誰ともつながっていないので、フレンドリーオンラインではできない、仮想空間でつながり合うことができるというところがいいのかなと、今お聞きして分かりました。</p>
澤栄美 委員	<p>言葉で説明しようとするのがすごく難しいですね。大きな丸と小さな丸。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>インターネットで検索していただくと、メタバースの概略の記事などがあると思います。</p>
須佐美徹 総合支援課長	<p>不登校の児童・生徒に対する対応としてフレンドリーオンラインというのは大変すばらしい取組だと思うんですけど、申込者数を見てみると、小学校が64名で不登校の児童757名いるわけですから9%ぐらいですね。中学生で見ると少し増えて206名ですから、1,395分の206ということで15%</p>
西山忠男 委員	

	<p>ぐらい。さすがに中学生は高校進学意識があるんでしょうね。だから15%ぐらいあると思うんですけど、この数字を増やしていかないといけないと思うんですよ。なかなかつながるのが難しいお子さんたちに対してこれは有効な手段だと思いますので、ぜひこれをもっと多くの不登校の人たちに受けてもらうように学校から勧めていただくよう取組をお願いしたいと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>今、これをもっと知ってもらうとか、参加者を増やそうという取組はされているんですか。</p>
須佐美徹 総合支援課長	<p>申込リーフレットは不登校とか関係なしに全小・中学生の家庭に配布しています。後は、先ほど言いましたけど、SSWであったり、担任の先生以外からもご紹介をいただいているところです。委員ご指摘のとおり、誰ともつながっていない子どもたちがまだまだいますので、そこをゼロにしたいと一番思っているところです。何とかつながって、そこから次につながるができると思いますので、ゼロにできるように頑張りたいと思います。</p>
澤栄美 委員	<p>フレンドリーオンラインで顔出ししてくる子どもというのはほとんどいないけど、参加はしてるわけですよ。すごくいいなと思うので、私もカウンセラーとしてカウンセリングで不登校関係の子どもの保護者の方へお勧めしてるんですけど、私はたまたまこれを知っているんですが、カウンセラーがどれくらいこのフレンドリーオンラインのことを知ってるのかなというのは気になるんです。数日前にカウンセラーとしてお勧めだと紹介したら、「え、そんなのがあるんですか」と飛びつかれた親子がいらっしまったので、カウンセラーにも知らせておくというのも一つ方法としてあるかなと思いました。カウンセラーの研修会の際にそういう説明はありますか。</p>
須佐美徹 総合支援課長	<p>SSWの研修会ではこれを紹介しております。カウンセラーの研修会ではしっかりと照会できていませんので、もちろん学校を通じても周知しますが、研修会も利用しながら、カウンセラーから保護者の方へ周知していただけるようお願いしたいと思います。</p>

苦野一徳 委員

喫緊の課題と、長期で考えるべき課題とがあると思うんですけど、喫緊の課題は先ほどお話になっている、誰ともつながっていない子どものことだと思うんですが、人数等々把握はできているのでしょうか。ホームスクーリングの子も恐らくいると思うんですね。それはそれで大丈夫でしょうか。フリースクールもあればフレンドリーオンラインもある。いろんな選択肢があると思うんですが、誰ともつながっていない子たちのことを把握できているのかというのはかなり気になります。いかがでしょうか。

須佐美徹 総合支援課長

私たちが昨年度これを立ち上げる際に、やはりそこが一番大事なところで、把握をしっかりしたいというふうに思いました。本年度からはどこともつながっていない子が分かるように、月ごとに報告していただき把握をするように形式を変えたところです。数値は手元にはありませんが、そのように把握をしています。SSWであったり、スクールカウンセラーであったり、フリースクールであったり、フレンドリーであったり、別室は学校に来てますけど、そのような選択肢があり、フレンドリーオンラインだったり、どこにつながってるかというのを見ながら、選択肢に丸が1個もついてない子はやはりどうにかしないといけないので、まずはそこを把握できるように今変えております。

苦野一徳 委員

それは本当に喫緊のことだと思います。

子どもたちが安心して学校に通える、自分がちゃんと尊重されている、楽しい、こういった学校にしていくのは本当に大事だと思っているんです。そのための抜本的なことを、対策というよりも抜本的なところをもっともっと一緒につくっていく必要があると思うんです。これは不登校のことだけじゃなくて全てにおいて関係してくることだと思うんです。先日も日本大学の末富先生が、子どもたちにこども基本法のこと等についてのお話ししてくださってたということですし、熊本市の場合は、とにかく子どもたちの声をしっかり聞こう、尊重しようという姿勢を前面に押し出しているんで、これからますますそういった学校づくりというののできていくのかなと思うんですけど、全国的にあれも駄目、これも駄目というのが本当に学校の中で増えていて細かくなってるんですね。それこそニックネーム禁止なんてもう一般的にもありますけど、お手紙禁止とか交換

日記禁止とかキャラクター入りの筆記具禁止とか、もうあれも駄目、これも駄目をずっと続けていて、子どもたち同士が、「あ、それ駄目なんだよ」、「え、そんなことやっちゃ駄目なのに」とお互いにずっと縛り合ってるシーンを至るところで見てるんですよ。ここに不安とか無気力とかって書いてありますよね。そんな環境の中にいたらそうなるよって私正直思うんです。前もってのリスク管理が実は一番のリスクになってるという可能性がとともあると思うんですよ。よかれと思ってトラブルを起こさせない、起こさせないとするばかりに、逆に子どもたちに自分たちの問題を解決するとか、自分たちで人間関係をつくるとか、そういう力を奪ってきた大人たちの初動というのがあると思うんですよ。

現場の忙しさ、大変さはとてもよく分かります。私もたくさん講師をしているのでよく分かるんですけど、ただ、本当にそれが子どもたちの学びや成長、あるいは子どもたちが安心して通えたり、楽しく通える学校になっているのか。何か本末転倒してしまっていないかということを経験的に考え直すような機会を私たちが持てないかなと思っているところなんです。この不登校の話題で総合支援課長に聞くというのも酷な話かもしれませんが、何かそういった場を持っていきたい。そのためには、そもそも学校って何をするといいんだろうか、子どもたちの成長、学びに本当につながるんだろうか、そういった根本の話をもっともっと我々が対応していかなくちゃいけないと思うんですよ。リスクがどうかという前に、もっと手前の根本のところをみんなで話し合えるような場をつくれたらと思っています。

遠藤洋路 教育長

そういう場というのはどういうイメージでおっしゃってるんですか。

菅野一徳 委員

各学校現場での校内研なんかも含めて、私たちはどんな学校を目指していくのかとか、どんな教員でありたいのか、どんなふう子どもたちと接するのか等々の目的を確認して、そこで合意して対話を通して実践をしていくというのが一番望ましいと思うんです。教育委員会としても、様々な研究があっても、子どもってどんな存在なのかというときに、放っておいたら悪さをするだとか、交換日記をやったらいつも悪口言うとか、子どもたちを信用できないから、その前に、トラブル回避のために

禁止しとこうと捉えるのか、それとも、子どもたちを信頼して任せて、待って支えていくとどういうふう子どもたちになっていくのかという研究がたくさんあります。やはり後者の子どもたちは成長できる。こういったことはよく分かっているわけですから、例えばそういったことを、各子ども間だったり、学校間だったり、そもそもの教育の本質や目的といった一番深い根っこのところを市内の先生たちみんなでもっと対応したいと思うんですよね。現象面にとらわれて、こんな問題があるからこんなふうに対処しなきゃ、こんなリスクがあるからこうやって前もってこれを努力しておかなきゃとやっている、いつまでたってもたちごっここというか、問題が根本から解決しないわけですよね。そうではなくて、どうあれば、私たち先生も含めて、保護者も含めて子どもたちも安心して楽しく暮らせる学校をつくれるかというのをもっと根本から、それこそ研修やるのもそういったことを伝達するのではなくて一緒に考えていく。先生たち含め対話を通してそういった本質部分を話し合っていけるような機会がもっと増えたらいいかなと思います。

遠藤洋路 教育長

今おっしゃったのは、市内の学校の先生に集まってもらって、そういう議論する場を教育委員会がつくったらどうかというご提案だということによろしいですか。

菅野一徳 委員

そうですね。でも、悉皆でやるのはどうかなと思うところはあるんです。基本的には手上げ方式というか、やっぱり悉皆でやらされると、嫌々の研修になってしまうということも多いと思うので、やりたい人たちが、きつとこういうこと考えてる先生たくさんいらっしゃると思うんですよ。熊本市も本気で子どもたちが安心して幸せに過ごせる学校の本質から考えるんだと、そういった意気込みとか志というか、そういったものをまずは手上げ方式で議論する。広聴事業とかも手上げ方式での参加だと思うんですけど、そういった方たちが少しずつまたつながって行って、また現場に持ち帰っていただいて、そういう機会ができたらいいいのかなと。悉皆というよりは手上げ方式がいいんじゃないかなと思っています。

遠藤洋路 教育長

教育委員会がやるのであれば、悉皆というよりも結構限られた人数しかできないような気がします。何千人というのはできないですからね。多くても何十人、それぐらいになってしまう

松島孝司 教育次長

のかなと思います。広聴事業も一つ、それに使える機会ではあると思いますし、それ以外でも何かその機会をつくるというのは軽易だと思います。それ以外でも日頃の研修の中でやるのか、それもいろいろ考えられるところはあると思います。

私も最近の流れとして、学校の意識も変わってきてるという認識を持っております。実は、私が指導課長の時代、苫野委員に、小中一貫についてだったと思うんですけど講師でおいでいただいて、学校ってこうあるべきだよねというお話をさせていただいたことがありました。あれはもう5年前だと思うんですが、あのお話を、学校の先生方が、今聞いたら受け取り方がまた全然違うと思うんです。ですから、今のご提案をぜひ委員会としても前向きに、例えば研修だったらセンターだったり人権教育指導室だったりいろんなところで提案できます。パッケージングした研修内容を示して、こんなのあるから学校でやってみませんかということもできると思います。いろんな方策を委員会としても、ぜひ前向きに検討させていただければと思います。

澤栄美 委員

私も年度始めの職員会議をよく思い出します。校長先生の経営方針が言われて、そして、すぐに校務分掌で、はい、じゃ、もう分かれて各自の仕事をしましょうと。校長先生が出された目標を、何か月後かに聞いたら誰も覚えてないみたいな状況で始まるというのが私の経験です。ですから、最初の時間のときにそういったことをちゃんとみんなが共通理解する、共通認識を持つということがすごく大事だと思います。まずは学校はそういう研修の時間をきっちり取るという前提の下に、学校の未来像とか、こういうことを考えたらいいというような動画でもいいので、それを見て、その後に学校のみんなで考えるとか、このように持つようにしないと、こんながあるので、よかったらやってみませんかでは絶対学校はやらないと思うんですよね。だから、そういう枠を必ずつくるようなことを教育委員会から働きかけていくというのはどうかなと思いついて聞いていました。

遠藤洋路 教育長

分かりました。そうすると悉皆に近いと思います。

西山忠男 委員

先ほど苫野委員の意見を聞いて非常に感銘を受けました。そういう視点を校長、教頭が持つことがとても大切だと思うんで

すよね。学校の幹部クラスの先生方にどんな学校つくりたいですかって聞くと、大抵の人が子どもの笑顔輝く明るい学校をつくりたいとおっしゃいます。じゃ、そのためにどうするんですかと聞けば、授業づくりですとおっしゃる。ほとんどの人が授業づくりです。授業が分かればみんな楽しく明るくなるんですとお考えになっていらっしゃる。それだけですかと言いたくなりますよね。そこに苦野委員のような視点がとても大事だと思うんです。そういう意味で、私は、幹部クラスがそういう視点を持つことが一番大事なんだろう、そういうふうに働きかけていくべきなんじゃないかなと思いました。

苦野一徳 委員

関連して2つほどなんですけど、研修の時間というお話があったときに、対話型の研修って本当に大事なんですよね。一番最初に校長先生が学校目標というお話もありましたけど、本当であれば、学校目標も上から下りてくるんじゃないで、それでは自分たちのものにならないし、自分たちでつくったものじゃないので、なかなか当事者意識も芽生えにくいところがあるんですよね。

少し別な方向の話になっちゃいますけど、やっぱり対話型の研修ってまず最初、そもそも自分たちどんな学校つくりたいのかということに対話するんですけど、本当はその前に何で自分たちは先生になったのかとか、どんな先生になりたいのかとか、そういうところから自分たちどんな学校つくりたいんだろうみたいな話をみんなで対話していくと、子どもたちが明るく笑顔というのは必ず出てくるし、あるいは大体どこの学校でも面白いことに、子どもたちが自立していけるのを支援できたりとか、お互いを尊重できるようにみたいな話に大体行き着いたりするんですよ。そこの最上位のところ合意されれば、じゃ、私たちがやっていることって本当にそうなるのかなとか、そういうのをするためのどうしていけばいいのかなという具体的なレベルで話をするることができる。こういうことをずっと繰り返して、対話を通して、上に言われたことやるんじゃないで、自分たちが当事者なんだという対話型の研修をずっと組んでいくと、本当に見違えるぐらいに学校が変わっていくというのは私もたくさん経験をしてきました。そういった対話型の研修づくりというのは可能なので、いろんな学校にご提案もできると思うんですよね。

もう一方で、1つ目の支援で、いやいや、そんなことやって

る時間ないよというのはよく聞くんですよ。これも逆で、対話を通して何のために学校あるのか等々のお話をしっかり合意できれば、それに必要ないと思えるものがあぶり出されるので、必ず断捨離ができる。逆に言うと、これをやらずに断捨離はできないんですよ。忙しくてできないのではなくて、逆にこういった時間を持つことで断捨離もできるし、自分たちがどうすべきなのかということも見えてくるので、こういった対話型の研修というのを教育委員会がプロデュースしたり支援したりしながら、各学校現場でできるといいかなと感じております。

澤栄美 委員

私のイメージもそうです。まず、何か基本になるようなお話をして、そして、先生方が対話して、今年うちの学校ではこういうことをしていくからこれは必要なだと学校の教育内容が決まっていくというのが本当じゃないかなと思うんです。もちろん運営委員会とかがあつて、代表者がそこで話し合うんですけど、みんながそこを話し合うというのすごく大事だなと思っています。それと、学校は授業を主にやっていますけど、それだけではないし、教諭だけが学校の教職員ではないですよ。だから、みんながこういった子どもたちを育てていくのに何が重要かというのをそれぞれの立場から話し合う場というのが一番最初に必要なんじゃないかなと思ってるんです。

それと、去年、尾ノ上小学校が授業づくりの中でそれぞれが対話しながら校内研修を進めていくという研究をされて、私も参加してたんです。先生たちが思い切って自分たちが思ってることを話す時間というのは、取ろうと思えば取れるわけですよ。だから、どんな時間を取るかということが大事ですので、最初から決まっていて、例年どおりとにならないようにすることが大事なかなと私も思っています。

出川聖尚子 委員

児童・生徒への支援というお話を聞き、まず生徒への支援が必要だとは思いますが、それと同時に、保護者への支援がとても大切なのではないかなと思っています。お子さんが学校に行かなくなった場合に、お子さんへの支援の方法は相談もしやすいんですが、それで子どもが学校に行かなくなると、自分が就労していたのが就労しにくくなる、働き方を変えなくてはならなくなるとか、もともと課題がご家庭にあった場合はソーシャルワーカーが入ったりということが、そういう方法でご家庭に支援に入るんですけど、全く今の状態では何もご家庭の心配

がないご家庭のお子さんになった場合に、家庭の中の在り方が変わったりするところをやはり支えていくような方法、視点を持つということが必要なのではないかなと思います。それを学校の教育委員会がするかどうか分かりませんが、入り口としては、そういう心配事とか、親御たちがそう思ってらっしゃるんだったら、そういう切り口で社会復帰されるということになるのかもしれないんですが、そういう視点でご家庭を見ていくというか、支えるような仕組みにつなげる、そういうことができればいいのかかなと思っているのが1点です。

それから、自分のクラスに学校に来なくなるお子さんがいたら、クラス担任の先生はとても心配されますし、できる限りのことをされてると思うんですけど、複数人になるようなことがあればもっと心配されると思うので、教員を支える仕組みみたいなことをつくっていただければと思っています。

小屋松徹彦 委員

皆様の話を聞きながら、私もいろいろと考えたのですが、今日のテーマである不登校の実態と対策ということで言えば、熊本市での取組については評価できていると思っています。

ただ、一方で気になるのが、不登校がどんどん数が増えていっているということと、その不登校の要因の中に無気力、不安、親子の関わり方というのが出てきますけど、何で無気力なんだろうか、何が不安なんだろうかというのを考えたりするわけですよ。そこの解決を図っていかないと、どこまでいっても単なるテクニックの問題じゃないような気がして、それで思ったんです。学校で学ぶことが、例えば社会に出てどう役立つとか、その辺の社会と学びとの関連性というか、これがなかなか子どもたちの中で結びつけるのは、難しいんでしょうけど、それを何とか伝えていくすべはないのかなと思うんですね。

皆さんご承知かと思いますが、学校という夜間中学の映画があるんです。この中の登場人物に中年の男性がいて、彼は小さいときに貧しい家庭だったものだから、ろくに教育を受けられなかったんです。そのまま上京してきて東京で就職するんですけど、実際その働く先で彼が直面したのが、物を運ぶのに彼は運転免許証を持ってないものだから、リヤカーで運ぶんです。夏場なんか暑いときにもやるわけですよ。それで彼はくたびれまして、免許証を取りたいと思ったわけです。免許証を取りたいのであれば、通常ならば教習所に行きますよね。ところが、彼は夜間中学に来るわけです。なぜかといったら、彼は字が書け

ない、字が読めない。だから、まずそこをしないことには免許証を取る次の段階にいけないというそういう彼が学校に入ってきて、そして、その彼は卒業前に亡くなってしまいうんですけど、亡くなった後に先生が、教室にいる生徒集めて幸福ということをテーマにして話を始めるんです。そこで初めてみんなが何だろう、何だろうと考えていって、いろんな意見が出てくるんですけど、結局学ぶということは、生きていていいとか、感覚的なことかなとヤンキーの兄ちゃんが言ったりするんですよ。何かあの一連のところを見ててこういうことかなと。やっぱり子どもたちが本当にそういうことを実感できれば、何か前向きといたしますかね、本当に学んでみようという気持ちになるんじゃないかなと思ったりして、そういうことが何か理由づけとできればいいなと思いました。

西山忠男 委員

今の小屋松委員のお話非常に印象的だったんですけど、無気力、不安という問題ですよ。私は、長年大学生を教えてきて、退職前の数年間、特に無気力な学生で、結局いつの間にか大学に来なくなるという学生が増えてきて、いろいろ面談もして対策を講じたりしたんですけど、最近、家で何しているのかと聞いたらゲームって言うんですよ。小さい頃からずっとゲームをしてきてるからゲームだけで1日が終わってしまう。それが結局無気力につながってしまう。やはり世相の移り変わりですよ。我々の子どもときはそんなものなかったから外で遊ぶしかなかったんですけど、今は1人でゲームができるんです。そういうことも大いに関係してると思うんですよ。

さっきのメタバースじゃないけど、本当に仮想空間で生きてるような感じですから、現実生きてるという感覚を何とかして与えないと、そういう無気力、不安からは脱することができないんじゃないかなという気がしますね。これ、とても大きな社会問題だと私は思います。これだけ右肩上がりに上昇してきてるとちょっと大変な問題だと思いますね。

苦野一徳 委員

本当に大事なテーマで、だからこそ学校教育にできることがあると思うんですよ。前もお話ししたかもしれませんが、今、長野県の伊那市立伊那小学校に足繁く行ってるんです。総合学習でとても有名な学校なんですけど、内から育つというキーワードや、子どもは、自ら求め、自ら決め出し、自ら動き出す存在であるという子ども観を徹底して共有するんです。子どもの願

いや思いをとにかく大切にすると全職員で話をし、常に子ども事実を中心にしていきます。動物飼育でとても有名で、3年間かけてヤギを育てたり、馬も育てたりとか、私がとても感銘を受けたエピソードは、子どもたち1年生が自分たちで小屋を建てる。小屋が完成したのが真冬で、マイナス10度になるけど、ここで寝泊まりしたいと言う。ここで寝泊まりしたら命の危険がある。でも、子どもたちがやりたいと言ってきたなら、大人たちはどうやったらそれができるを考えて、保護者も一緒にかがり火をたいて、万が一のために保健師さんが来て、とにかく子どもの熱い思いが出てきたら、それを駄目って言うんじゃないくて、どうしたらそれを一緒になえられるかということをとことん考えて、そういう文化や伝統を持ち、何十年もそういった活動をしている学校なんです。先ほど私が申し上げた、例えばお手紙や交換日記、これって本当に子どもたちの学びをどんどん削いでると思うんです。宿題はやりたくないけど、友達にお手紙を書きたい。お手紙を書くことで字を学ぶ。こういうことをやっているのに、お手紙を持っていこうと思ったらお手紙は駄目って言われる。交換日記をやったら悪口になるから駄目って言われる。ちょっと子ども信じなさ過ぎなんじゃないかなって思うんですよね。そんな中でずっといたら無気力になって当然だと思うんですよね。自分たちの願いや思いが出てきても、常にそれ駄目ってずっと言われているうちに、ジャン・ジャック・ルソーの言葉にあるように、ずっとそうやって言われていたら、息しろって言わないと呼吸さえなくなるという言葉があるんですけど、本当にそうです。逆に言うと、そういった子どもたちの思いや願いを本当に一緒に実現させていくのは、先生にとっても非常に素晴らしいことだし、学校現場が一気に活性化すると思うんですよね。どんな子どもたちの姿を私たちは見たいんだろうか、どんなことを一緒にやっていきたいんだろうか。やっぱりそこに立ち戻るんですけど、そういう対話を通して、子どもたちがそうやって生き生きできる場づくりというのが必ずできるので、その対話の機会をつくりたいなと思いますし、必ずできると思っています。

遠藤洋路 教育長

他にご発言がなければ、自由討議は以上といたします。

〔閉会〕

令和4年（2022年）11月 教育委員会会議録【11月24日（木）】

遠藤洋路 教育長

本日の会議日程は全て終了いたしました。これで、令和4年11月定例教育委員会会議を閉会いたします。